国立大学附置研究所・センター会議
Japan Council for Research Institutes and Centers of National Universities

文部科学省と国立大学附置研究所・センター　個別定例ランチミーティング

第27回　北海道大学　スラブ・ユーラシア研究センター（2022.12.16）

12:05－12:10(5分)　：スラブ・ユーラシア研究センターの概要
野町素己　センター長

12:10－12:25(15分)　：「14世紀の危機」についての文理協働研究
――社会・自然・生物学上のアーカイヴスをつなぐ
諫早庸一　助教

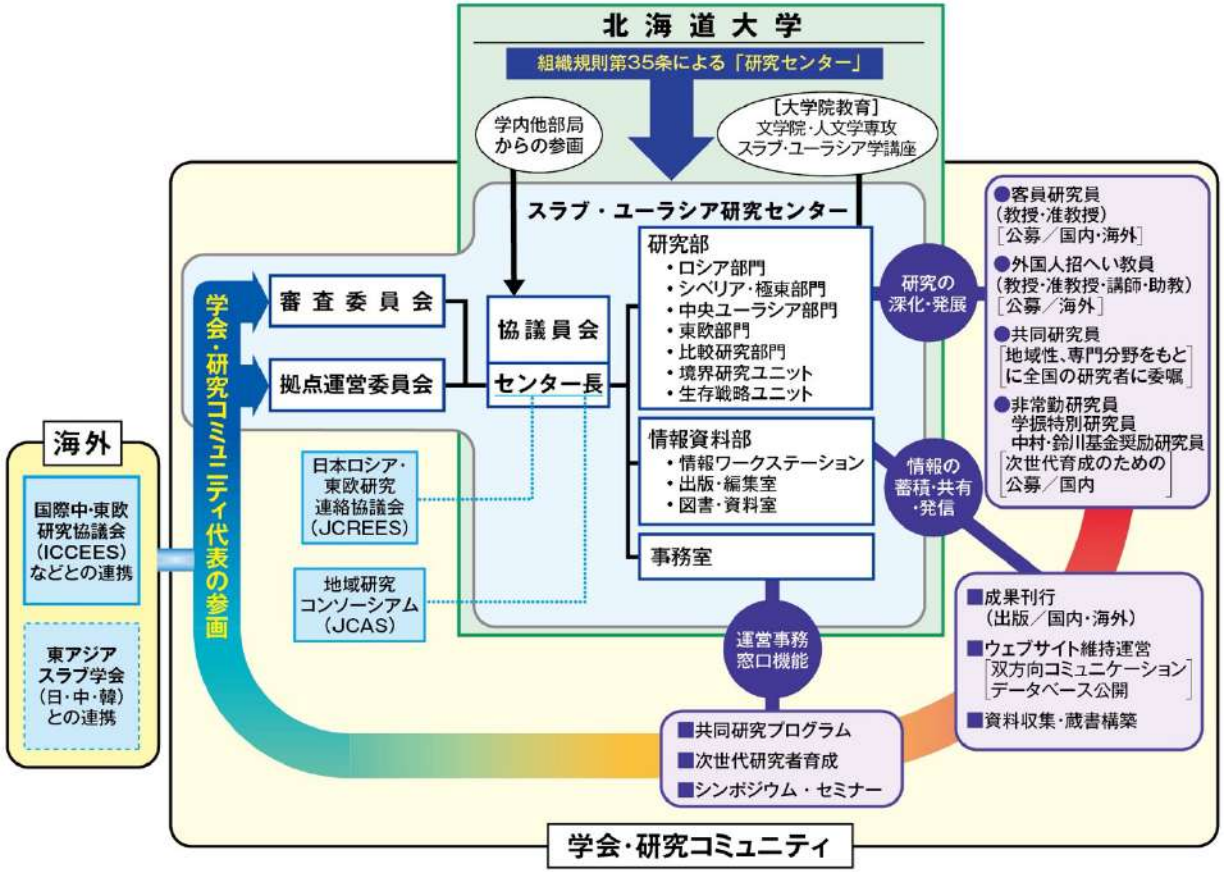
12:25－12:45(20分)　：質疑応答

組織概要・沿革・課題

教育研究組織の概要

- スラブ・ユーラシア研究センター（以降スラブ研）は、1955年に法学部附属施設として設置。スラブ・ユーラシア（旧ソ連・東欧）地域を、政治、経済、歴史、人類学、文化等から学際的・総合的に研究する国内唯一の専門研究機関。
- 学内共用施設（1979）、全国共同利用施設（1990）として、研究規模・領域を量質ともに拡大。
- 重点領域研究（1995～7）、21世紀COEプログラム（2003～7）の成功を経て、共同利用・共同研究拠点（2010）に認定。新学術領域研究（2008～12）、グローバルCOEプログラム（2008～12）の成果を評価され、スラブ研はS評価を獲得（2013, 2015）。
- 国内外の多くの重要研究機関や諸学会と連携し、本邦のスラブ・ユーラシア地域研究の発展と国際化に主導的な役割を担う。
- 文学研究院ではスラブ・ユーラシア学講座を有し、大学院生の指導を行う。寄付金による若手フェローシップを複数運用し、全国規模で次世代育成を推進。

スラブ研の構造とスタッフ



・境界研究ユニット（H25年設立）

境界研究を主導し、境界問題を研究する人材を育成することを目的として設置（グローバルCOE「境界研究の拠点形成」の後継）

・生存戦略研究ユニット（R4年設立）

R3年度共通政策課題分（共同利用・共同研究拠点の強化）による「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」推進を目的として設置

専任研究員

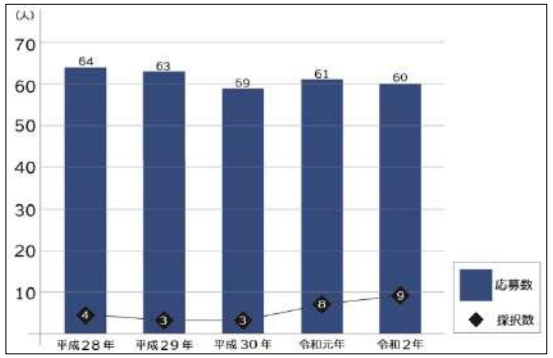
研究部 ロシア部門	田畑　伸一郎	ロシア経済・比較経済体制論
	服部　倫卓	ロシア・ウクライナ・ベラルーシを中心とした旧ソ連諸国の経済・政治情勢
	安達　大輔	文学、表象・身体・メディア、18世紀から現代にいたるロシアの言語文化
	青島　陽子	中東欧・ロシア近現代、ロシア帝国統治構造
シベリア・極東部門	ディビッド ウルフ	近・現代ロシア史、シベリア極東史、冷戦史、北東アジア地域研究、国際政治
	岩下　明裕	ロシア外交、北東アジア地域研究、ボーダースタディーズ
中央ユーラシア部門	宇山　智彦	中央アジア近代史・現代政治、比較帝国史
	長縄　宣博	中央ユーラシア近現代史、ロシアのイスラーム
東欧部門	仙石　学	比較政治経済、中東欧の福祉政治
地域比較部門	野町　素己	言語学、スラブ語学
助教	諫早　庸一	中央アジアの前近代史、モンゴル史、科学史
特任助教	後藤　正憲	文化人類学、ロシア・シベリアの農村文化
	井上　岳彦	中央ユーラシア近現代史、ロシア帝国の仏教政策
	村上　智見	考古学（シルクロード）、染織史
情報資料部	兎内　勇津流	図書・資料

※リサーチ・アドミニストレーター（URA）をR5年2月より採用予定

2022年度外国人研究員

Edyta Bojanowska（イェール大学、文学）
Alyssa DeBlasio（ディキンソン大学、文学）
Marc Greenberg（カンザス大学、言語学）
Ryan Jones（オレゴン大学、経済学）
Michael Khodarkovsky （ロヨラ大学シカゴ、歴史学）
Ranko Matasović（ザグレブ大学、言語学）
David Moon（ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン、歴史学）
Kirill Zubkov（ロシア国立研究大学高等経済学院、文化学）

国際的に活躍する研究者の公募による招へい



※公募により外国人研究員を招へい
H28年からR2年まで応募307名のうち27名採用
（採択率8.8%）

スラブ研の研究活動：個人研究

科研費基盤A

	研究代表者	研究課題名	期　　間
基盤A	宇山智彦	権威主義とポピュリズムの台頭に関する比較研究	H30～R4 年度
	ディビッド・ウルフ	戦後北東アジアにおける歴史的分岐点のマルチアーカイブ分析	H31～R5 年度
	野町素己	新コーパスに基づくカシュブ語文法の多階層的研究	H29～R4 年度
	仙石学	政党政治の変動と社会政策の変容の連関：新興民主主義国の比較	R2～R5 年度

野町素己（センター長）

東欧諸語を研究対象とし、スラブ系少数話者言語を扱う学際的研究が評価され、第13 回日本学術振興会賞及び日本学士院学術奨励賞受賞（2016）。リングラフ・ビトスラバ賞受賞（2018）、セルビア・スラブ学会名誉会員（2019）。地域研究コンソーシアム会長（2022～）

宇山智彦

日本中央アジア学会会長、ロシア・東欧学会副代表理事。中央ユーラシアを題材とした比較帝国史・比較政治研究の世界的専門家。外務省や経産省と連携し対中央ユーラシア政策を提言。大同生命地域研究奨励賞（2010）、カザフスタン学士院・アラシュ・オルダ100 周年記念章受賞（2022）。日本学術会議会員（2017～）。

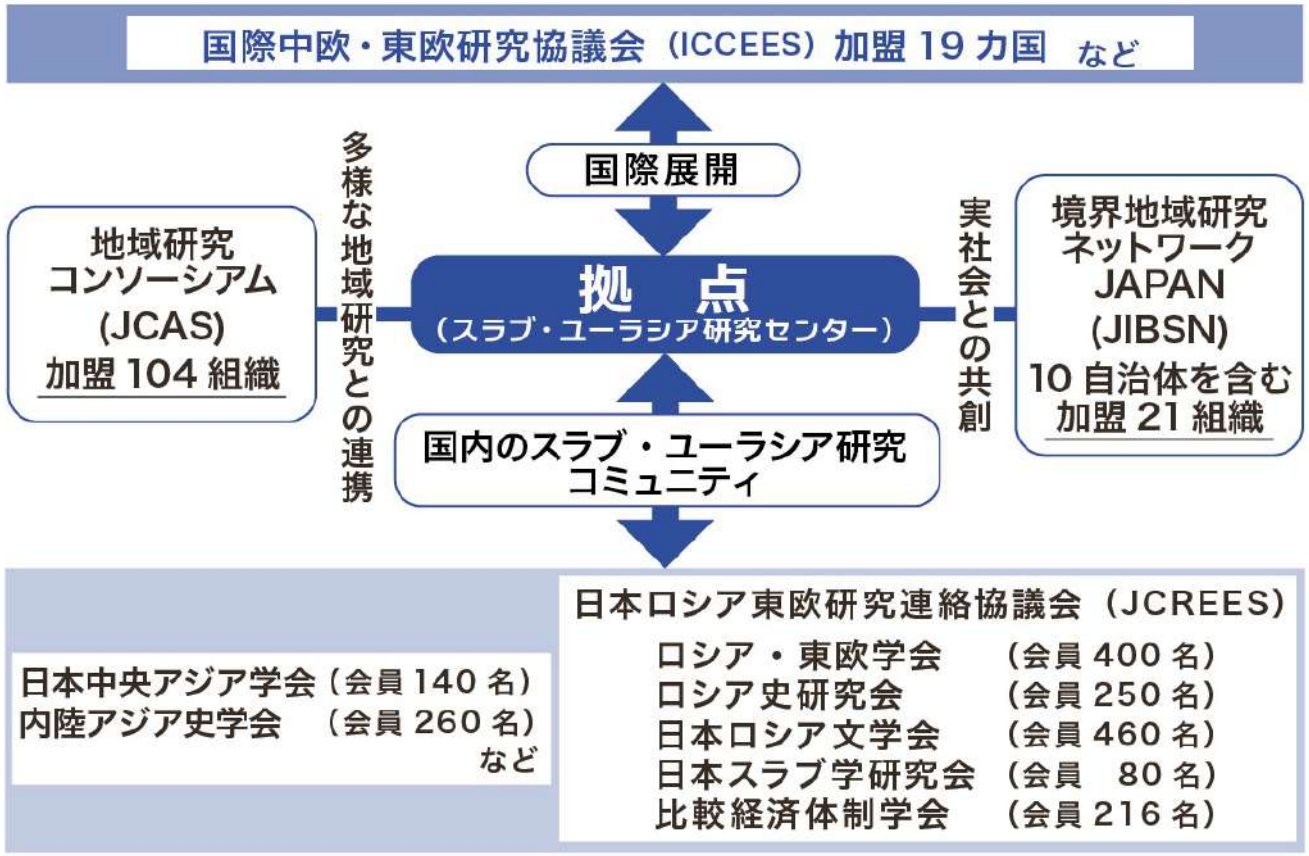
ディビッド・ウルフ

北東アジア地域史の世界的第一人者。ウィルソンセンター冷戦史国際プロジェクトのリーダー。15 か国200 名の研究者によるロシアの第一次世界大戦と革命（全13 冊）の刊行に従事。ノッティンガム大学、ハーバード大学、コロンビア大学でも勤務。ドイツで最も栄誉あるフンボルト賞受賞（2022）。

※その他、科研費基盤B（7件）、国際共同研究加連基金、若手研究、挑戦的研究など（各1件）。その他、鹿島学術振興財団、サントリー文化財団などの民間財団からも研究資金を獲得

スラブ研の研究活動：学内外との連携及び共同研究 ①

関連研究分野及び研究コミュニティの発展への貢献



人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業東ユーラシア研究プロジェクト

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点

（令和4年度より6年間）

- 人間文化研究機構によるネットワーク型基幹研究プロジェクト「地域研究推進事業」のうち東ユーラシア研究担当として設置。
- 研究目的は「東ユーラシアの文化衝突とウェルビーイング」の解明。中国とロシアを含むこの地域が世界に及ぼす影響力を、文化衝突とウェルビーイング（幸福感）から捉え直す。
- 近現代史を踏まえ、宗教、文化、経済、政治活動が起こす文化衝突と共生の実態を明らかにする。

スラブ研の研究活動：学内外との連携及び共同研究 ②

「長い20世紀の終焉」という歴史的転換期

・1870年代以来の欧米中心の世界秩序（民主主義、人権、多文化主義、自由貿易、グローバリゼーション）
・欧米中核部の疲弊、世界秩序の周縁にあった中露などの台頭

国際舞台における課題解決の複雑化に対応し、敗者を生まない国際秩序を展望するための確かな知識を構築することが急務

スラブ・ユーラシア研究センター

- ハーヴァード大学（ケンブリッジ）
- ジョージ・ワシントン大学（ワシントンD.C.）
- ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（ロンドン）
- オーストリア科学アカデミー（ウィーン）
- ワルシャワ大学（ワルシャワ）
- 高等経済学院大学（モスクワ）
- ロシア学士院スラブ学研究所（モスクワ）
- ビルケント大学（アンカラ、トルコ）
- 中国社会科学院ロシア東欧中亜研究所（北京）

センター長
- 協議員会
- 拠点運営委員会
- 審査委員会

研究部
- ロシア部門
- シベリア・極東部門
- 中央ユーラシア部門
- 東欧部門
- 地域比較部門
- 境界研究ユニット

部局横断型ユニット
- 境界研究
- 生存戦略研究（新設）

情報資料部
- 情報ワークステーション
- 出版・編集室
- 図書・資料室

事務室

クロスアポイントメント

学内文系部局
- 法学研究科
- 経済学研究院
- 文学研究院
- メディア・コミュニケーション研究院
- 公共政策学連携研究院

スラブ・ユーラシア研究センターにユニットを新設

ロシア・中東の動態を同時に捉える枠組みの提唱

東京外国語大学 AA研 京都大学 東南アジア研

- 中東欧
- ヨーロッパ部ロシア
- 中央アジア
- シベリア極東

生存戦略研究ユニット
（計21名：スラブ11名、他部局8名、クロスアポイントメント2名）

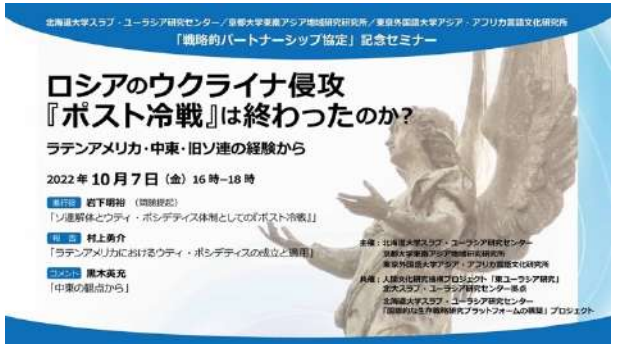
国際関係・経済部門	政治・歴史部門	文化・言語部門
スラブ・ユーラシア研究センター・・・・・・・・・3名	スラブ・ユーラシア研究センター・・・・・・・・5名	スラブ・ユーラシア研究センター・・・・・・・・・3名
法学研究科・・・・1名	文学研究院・・・・1名	文学研究院・・・・2名
経済学研究院・・・1名	メディア・コミュニケーション研究院・・・・・・1名	公共政策学連携研究院・・・・・・・・・・1名
京都大学・・・・・1名（クロスポイントメント）	東京外国語大学・・1名（クロスポイントメント）	メディア・コミュニケーション研究院・・・・・・1名

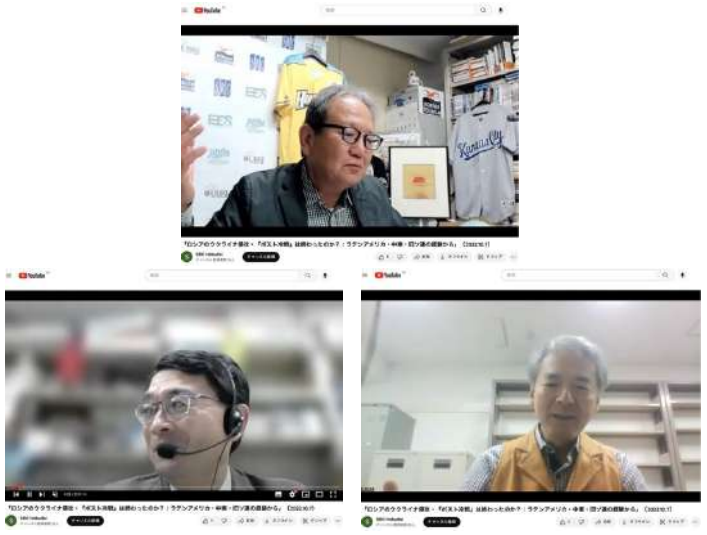
生存戦略研究プラットフォーム

スラブ・ユーラシア研究と中東・イスラーム研究との融合によって新たな知見を獲得するとともに、
日本の対外貢献へのアドボカシー、当該地域との交流及び国際協力の発展を目指す。

京大東南アジア研、東京外大AA研との戦略的パートナーシップ（R4年度より）

・人事交流（クロスアポイントメント）
・共催セミナー
・地域研究コンソーシアムへの貢献





スラブ研の研究活動：国際展開

スラブ研が主導する学術交流協定に基づく研究教育ネットワーク

大学間交流協定

1. モスクワ国立大学
2. オウル大学
3. ブダペスト工科経済大学
4. サハリン国立大学
5. 極東連邦大学
6. タルトゥー大学
7. ロシア科学アカデミー極東支部
8. イルクーツク大学
9. ベオグラード大学
10. ロシア北東連邦大学
11. サンクトペテルブルグ国立大学
12. ブカレスト大学
13. ラトビア大学
14. ワルシャワ大学
15. 東フィンランド大学
16. 世界経済外交大学
17. 高等経済学院

部局間交流協定

1. フランス国立東洋語東洋文化研究所
2. ハーバード大学 ロシア・ユーラシア研究センター
3. ライデン大学 東欧法律・ロシア研究所
4. 中国社会科学院（北京）東欧・ロシア・中央アジア研究所
5. オックスフォード大学セント・アントニーズ校 ロシア・ユーラシア研究センター
6. ロシア科学アカデミー 東洋学研究所
7. ロシア科学アカデミー スラブ学研究所
8. 中国黒竜江省社会科学院
9. ロシア科学アカデミー ロシア文学研究所（プーシキンの家）
10. カルムイク国立大学
11. マケドニア学士院地域言語研究センター
12. ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古学・民族学研究所
13. V.G.コロレンコ記念ポルタワ国立教育大学英語・世界文学学習法研究教育センター
14. ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン スラブ東欧研究学院
15. ロシア科学アカデミー シベリア支部
16. セルビア学士院セルビア語研究所

（提携順）

研究コミュニティからの提案と成果を共有し、発信する

国際シンポジウム（共同研究成果の国際的発信）

主に外部資金が財源の国際シンポジウム開催（年2～3回。プロジェクト次第で3～4回）

研究セミナー（共同利用・共同研究の成果共有と蓄積）

外国研究者の参加を含むセミナーやワークショップを通年で開催（年50～60件程度）

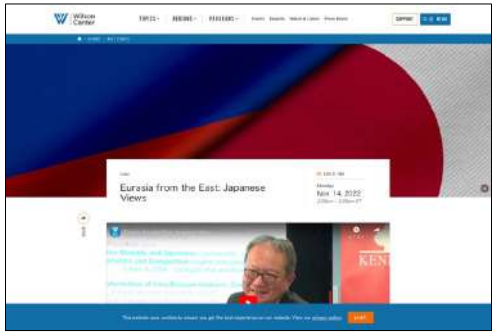
ジャーナル

自らの媒体での研究成果発信に加え、4種の査読付き研究誌（和文・欧文）を運営し、国内外の研究コミュニティの発展に貢献（いずれもオープンアクセス）

実社会のための共創研究セミナー

実社会を担う多様なステークホルダーとともに地域の経済・社会的な課題への対応を図るべくco-working seminarを組織。その成果は国際的に発信

生存戦略研究の一環として、R4年度からウィルソンセンター・ケナン研究所及びハーバード大学・デイビスセンターとの連携を強化



ウィルソンセンター・ケナンズ研究所HPより

ハーバード大学・デイビスセンター HPより

スラブ研の社会的貢献

実社会のための共創研究セミナー

実社会のための共創研究セミナー（実社会共創セミナー）

JIBSNセミナー（2022年11月19日、石垣市で開催）を紹介する新聞記事

11/12 長崎新聞

11/12 北海道新聞

11/17 毎日新聞

11/20 八重山毎日新聞

11/20 北海道新聞

JIBSN オンラインセミナー　共通論題「境界地域と感染症」

境界地域の首長9人が一堂に会し、離島ならではの感染症対策など現地の取り組みについて意見交換がされた（稚内・礼文・根室・標津・竹富・五島・与那国・対馬・小笠原）。約300名が登録。webにて公開中（2021年1月23日）

北海道大学総合博物館 × 境界研究ユニット（UBRJ）

極北のロシアから中国シルクロードへ　写真展

ツーリズム小史 / 観光を創る

国境標石

グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」（2009-2013）を契機に、本学の人文・社会系部局及び総合博物館を横断する境界研究ユニット（UBRJ）を設置。2011年には境界地域の自治体を束ねる境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）の設立を主導し、ツーリズムの造成等を軸に産学自治体連携を実現。

- メディア・実業界などのステークホルダーとの実社会共創セミナー
- 境界地域の自治体を糾合した研究と実務をつなぐネットワーク運営
  （境界地域ネットワークJAPAN:JIBSN 2011年設立。代表：竹富町）
- 北海道大学総合博物館を通じた研究成果の社会発信

公開講座（1986～）

一般市民を対象とした公開講座を開講。共通テーマでスラブ研や学外講師が講義を担当。毎年50～100名程度の市民が参加。

過去の公開講座

2022年　「溶解する帝国―ロシア帝国崩壊を境界地域から考える」
2021年　「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」
2020年　コロナ禍により休止
2019年　「再読・再発見！スラブ・ユーラシア地域の古典文学と現代」
2018年　「ロシアと北極のフロンティア：開発の可能性と課題」
2017年　「境界地域から北東アジア　国際関係を考える」

公開講演会（2012～）

専任研究員の最新の研究内容やスラブ・ユーラシア地域の最新事情を、市民・学生・ジャーナリストなど一般に向け広く情報発信。年4回程度開催。

過去の公開講演会

2022年 12月　第43回　ラテンアメリカの再左傾化：現状と背景（村上勇介）
2022年 10月　第42回　ポーランドとウクライナ：複雑な両国の関係を読み解く（仙石学）
2022年 6月　第41回　21世紀の東方問題：アフガニスタンからウクライナへ（黒木英充）
2022年 3月　第40回　コロナ・境界・地政治：私たちがいま考えるべきこと（岩下明裕）
2021年 12月　第39回　ヤーコフ・プロタザーノフ：帝政ロシアとソ連が愛したメロドラマ監督（安達大輔）
2021年 9月　第38回　ロシア帝国のナショナル・イマジネーション（青島陽子）
2021年 6月　第37回　モンゴル帝国の崩壊：ユーラシアから考える〈14世紀の危機〉（諫早庸一）
2021年 3月　第36回　日本学術会議事件から見る政治・社会・学問：ユーラシア・欧米諸国を参照しながら（宇山智彦）

異分野融合研究への挑戦 (文理協働を目指して)

国際的に注目される北極域研究

北極域の持続的発展に関する異分野連携研究

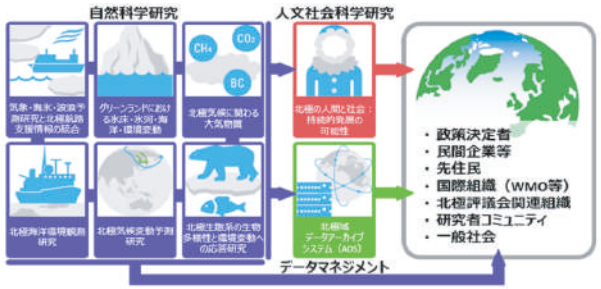
- 自然科学と人文社会科学の異分野連携として実施された文科省の北極域研究推進プロジェクト（ArCS、2015～19）。
- 全国から約30人の研究者が参加する共同研究「北極の人間と社会：持続的発展の可能性」を組織・運営。
- 地球温暖化の影響による北極海航路の利用や北極域資源開発の可能性の急拡大を明らかにし、産業界や自治体のステークホルダーに提示。
- 自然科学者や現地研究者との合同調査で、永久凍土の融解をもたらす気候変動が現地住民に与える影響を解明。
- 日本の北極政策への提言発信やロシア語での環境教育教材の刊行など、研究成果の社会的還元でも顕著な成果を上げた。

イメージ図

日本の北極政策への提言や
ロシア語での環境教材刊行

調査の最重要地域：
ヤマル半島のガス開発

国際共同研究推進メニューの概念図



「14世紀の危機」についての文理協働研究
――社会・自然・生物学上のアーカイヴスをつなぐ

- 歴史学（東洋史＋西洋史）、古気候学、天文学、情報学などを含む文理協働研究。
- 北海道大学若手研究加速事業（2019年度）から、スラブ・ユーラシア研究センター「プロジェクト型」共同研究（2020年度）、さらに科学研究費助成事業基盤研究(B)（2021年度～2024年度）に発展。
- ユーラシア史を転換させた「14世紀の危機」を、社会・自然・生物学上のアーカイヴスからデータ集め、分析・解明する。

次世代育成・教育

大学院教育（2000～）

- 2000年に文学研究科にスラブ社会文化論専修（2019年の文学研究科改組でスラブ・ユーラシア学講座となる）を設置し、大学院教育を開始。国際関係・政治・経済・社会・歴史・文化・人類学など、多様な学際的知識を備えたスラブ・ユーラシア地域に関する専門家・研究者の養成を目的。
- 入学者の多くは他大学出身で、研究テーマや対象地域は極めて多彩。大学院生は共同研究室が与えられ、国内随一の蔵書の利用、スラブ研に滞在する世界トップレベルの研究者との交流など、他大学と比較して、恵まれた環境の下で研究を推進。
- 博士課程修了者は、大学教員を中心とした研究者や教育者として、スラブ・ユーラシア研究の発展に貢献、修士課程の卒業生もまたスラブ・ユーラシア研究で得られた知識を生かし、多様な領域で活躍。

大学院生の授賞（一部抜粋）

生熊源一（2018年博士課程修了）	2018年	日本ロシア文学会賞
秋月準也（2018年博士課程単位取得退学）	2016年	第９回小田島雄志・翻訳戯曲賞
松下隆志（2015年博士課程修了）	2013年	第４回日本学術振興会育志賞
高橋沙奈美（2011年博士課程修了）	2012年	第８回国際宗教研究所奨励賞
麻田雅文（2011年博士課程修了）	2011年	第10回アジア太平洋研究賞（井植記念賞）
高橋沙奈美（2011年博士課程修了）	2008年	日本ロシア文学会賞

など

北海道大学

「14世紀の危機」についての文理協働研究

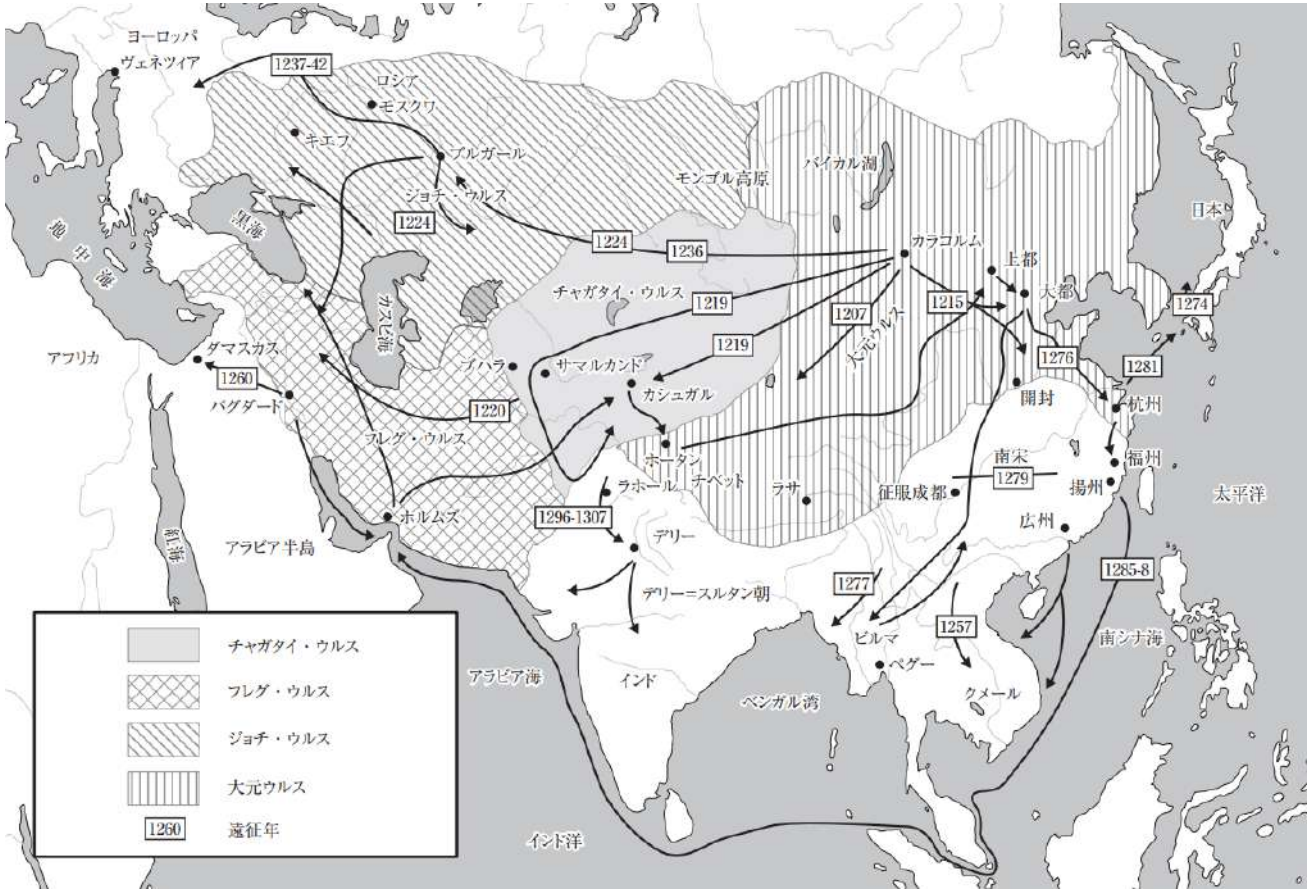
――社会・自然・生物学上のアーカイヴスをつなぐ――

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
地域比較部門

助教　諫早　庸一

2022年12月16日

私の研究＝モンゴル帝国史



【史上最大の陸上帝国】

- 1206年

  モンゴル部のテムジン/チンギス・ハンによるモンゴル高原の統一。

〈生態圏の臨界へ〉

- 1259年

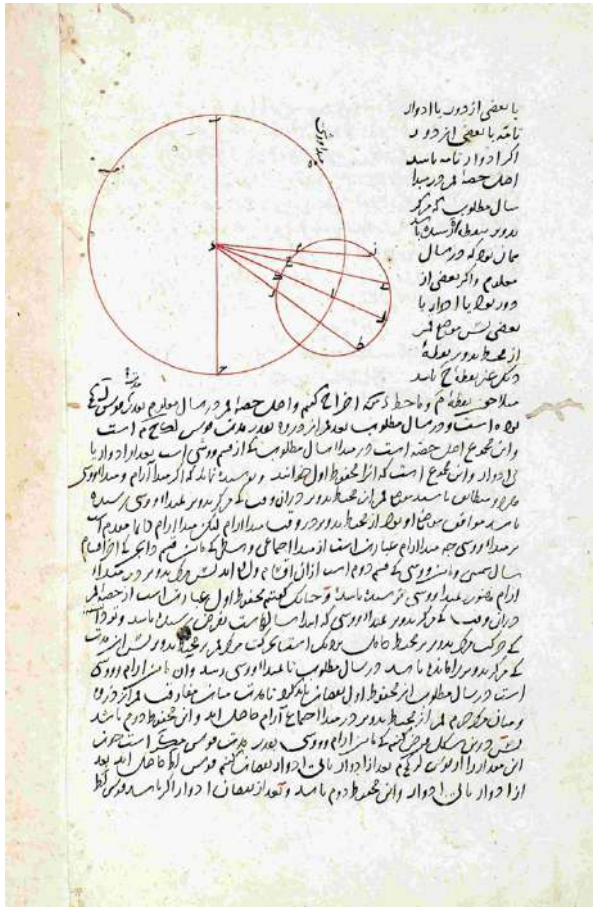
  第4代大ハン・モンケの死に伴う、帝国の4分裂。

- 1368年

  大元ウルスの滅亡。

諫早庸一『ユーラシア史のなかのモンゴル帝国』みすず書房, 2023年刊行予定, 5頁。

博士号取得までの研究＝天文学史



【ペルシア語で記された中国暦の研究】

- イスラム圏で記された初の中国暦の記述（13世紀中葉）
- ムスリムの博学者と中国の道教徒とが直接対話で生んだ作品。
- モンゴル帝国の、「統合」以上に「差異」を重視する文化政策を反映。

Nīsābūrī, *Kashf al-Ḥaqāʾiq-i Zīj-i Īlkhānī*. Ms. Rampur, Raza Library, Persian 1203, 34r.

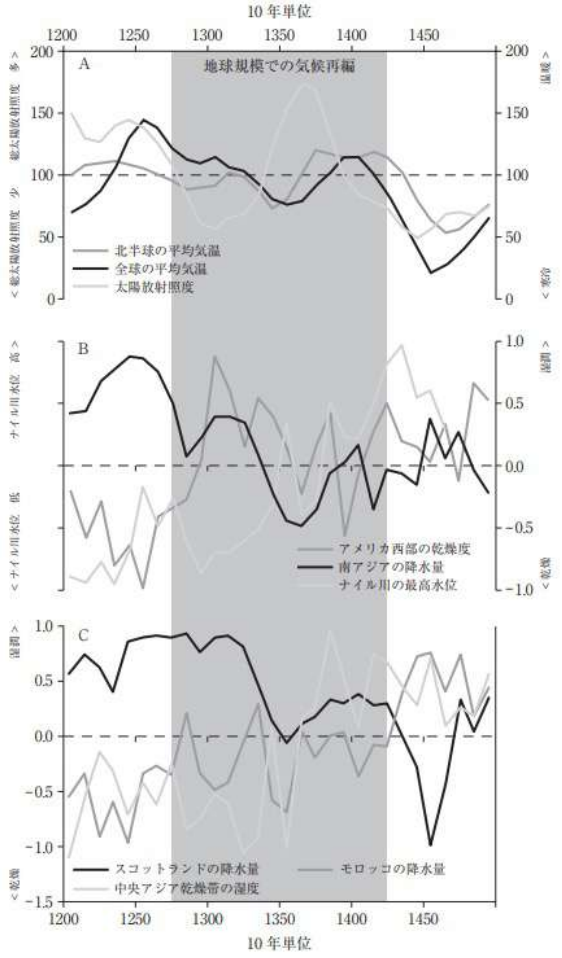
ヘブライ大学でのポスドク研究

【データベース JPP SPRINGの構築】

- ポスドク研究員として、ERCプロジェクト “Mobility, Empire and Cross Cultural Contacts in Mongol Eurasia”（拠点はヘブライ大学）に、2年2か月にわたって参加。
- **JPP SPRING** =モンゴル帝国期（1206～1368年）のユーラシアで活動した個人について記した多言語史料について、英訳を提示し、キーワードでタグ付けして相互検索を可能にしたInternet-Based Fully Relational Database。
- 現在までで漢語・ペルシア語史料を中心に、アラビア語・ロシア語・アルメニア語・ラテン語等々、660を数える史料が使われ、そこから14,000に迫る記事が、当時活動した人物を記録しており、その数は13,600人以上にのぼる。
- データ蓄積に大きな地域差は見られるが、13～14世紀のユーラシアに関して、**JPP SPRING**に比する文献データ蓄積を誇るデータベースは他に存在しない。

http://mongol.huji.ac.il/database

スラブ・ユーラシア研究センターでの研究＝環境史



【「**14世紀の危機**」に関する文理協働研究】

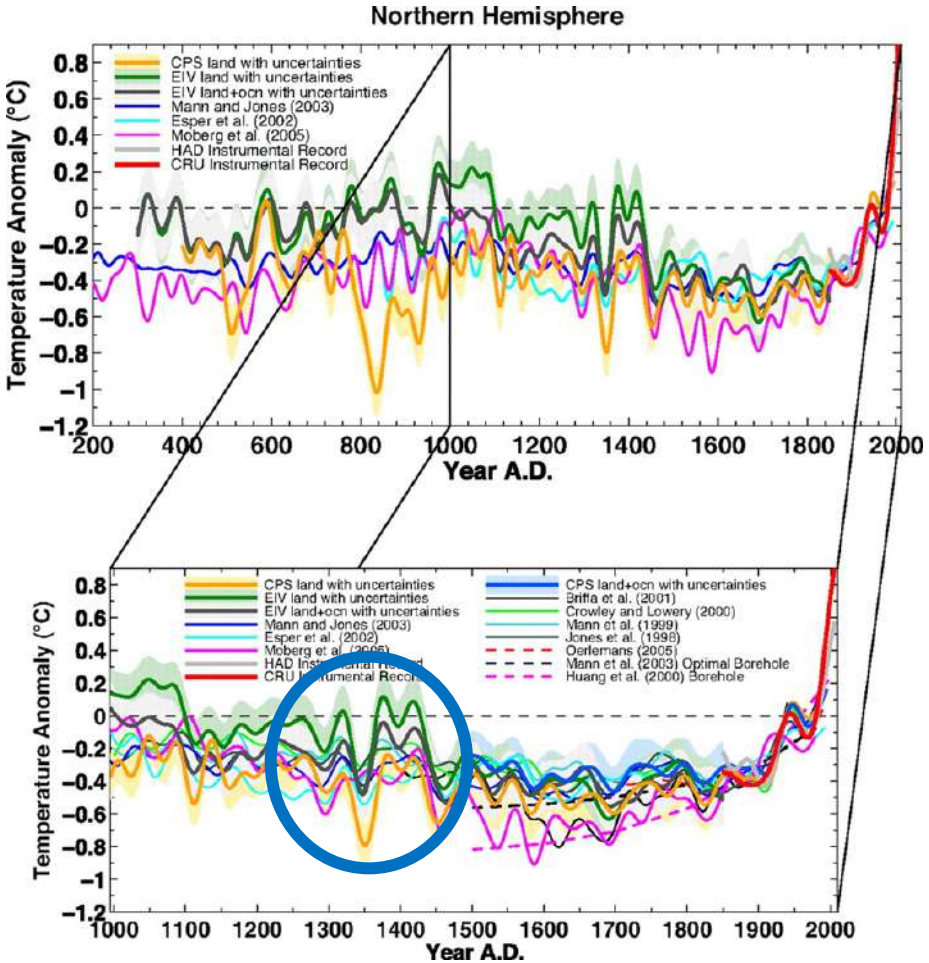
- 「**14世紀の危機**」＝ヨーロッパ史の転換期

この文脈における「**14世紀の危機**」とは、まずは1315～22年に北西ヨーロッパの大部分を襲った飢饉による経済の後退・停滞であり、この危機を決定付けたのは1348年からの「黒死病」の流行であった。

ただし、こうした危機による人口減は、それ以前に飽和状態にあったヨーロッパの人口増を止め、人口と資源との間の均衡を回復させることで、この世界の跳躍を準備したとも言われる。

諫早庸一『ユーラシア史のなかのモンゴル帝国』みすず書房, 2023年刊行予定, 14頁。

「中世温暖期」から「小氷期」へ（1270年代から）



- **地球全体とくに北半球**

  1270年代から気温が下降。

- **南アジア**

  モンスーンが弱まり始め、1280年代にはインド亜大陸全体で衰えを見せる。

- **北ヨーロッパ**

  北大西洋においては1320年代以降、極域の高気圧が南にせり出しサイクロンがより南寄りの軌道をとると、北ヨーロッパは数度の厳冬を経験するようになる 。

- **地中海および中央アジア**

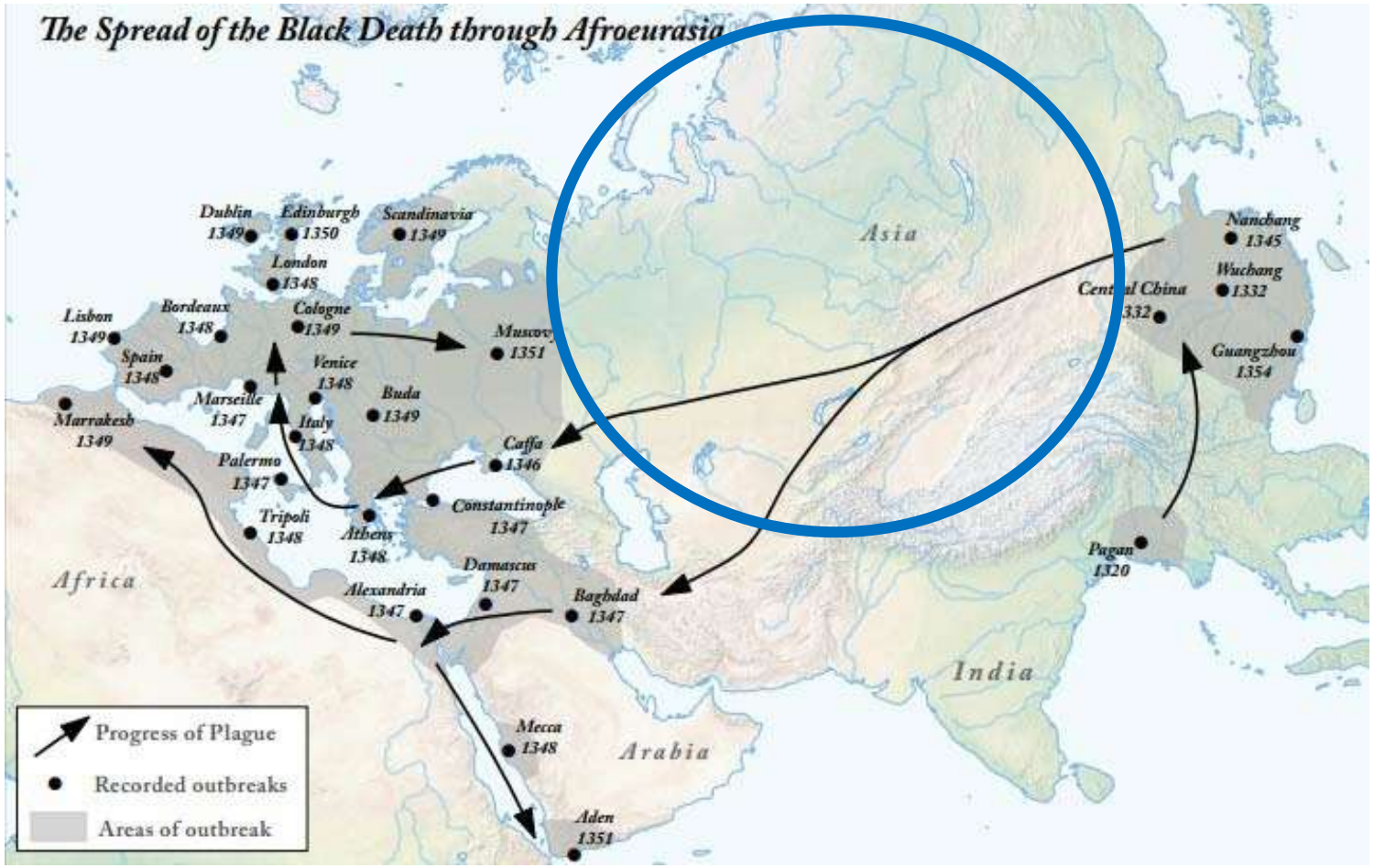
  南寄りのサイクロンは南ヨーロッパと北アフリカにひとしきり雨をもたらし、湿った西からの気流が中央アジア乾燥帯を通るようになったことで、ここでは湿度が断続的に上昇し始める。

確立された大気循環パターンはほぼすべての地域で不安定になり、それが進行するにつれて、異常気象と連続的な大凶作が、ユーラシア大陸全体に経済的混乱をもたらすことになる。

M. Mann et al. “Proxy-Based Reconstructions of Hemispheric and Global Surface Temperature Variations over the Past Two Millennia,” *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 105/36 (2008), Fig. 3;ブルース・M・S・キャンベル; 東京都立大学西洋中近世史ゼミ(訳)「『大遷移——後期中世世界における気候・疫病・社会』より第1章」『人文学報』(歴史学・考古学) 第49号 (2021年): 33–34頁.

北海道大学

黒死病と、ブラックボックスとしてのスラブ・ユーラシア地域



マクニール『疫病と世界史』(1976年)

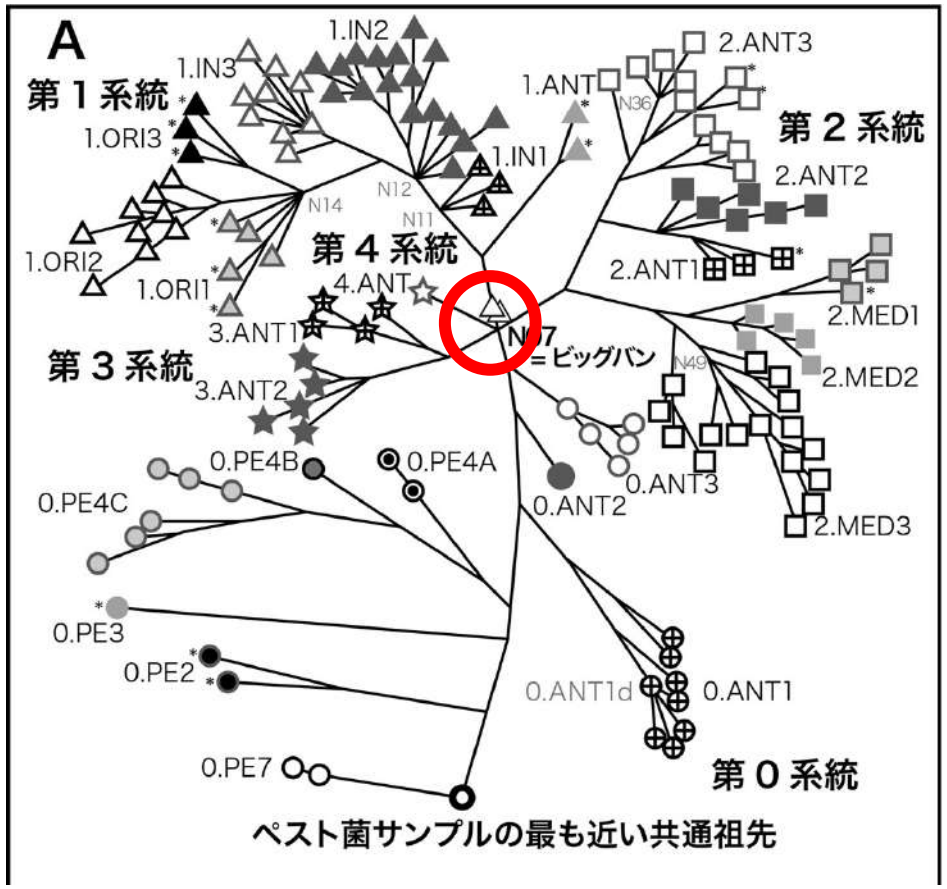
ペスト菌の起源が雲南にあり、その人的感染の端緒が1331～32年頃の中国河北地方にあるとした。

その後16年間にアジアの隊商路を旅して1346年にクリミアへと到達。

そこからペスト菌は、ヨーロッパと中東の大部分に侵入していく。

"Big Era Five: Patterns of Interregional Unity (300–1500 CE)," World History for Us All (https://whfua.history.ucla.edu/eras/era5.php).

3種のアーカイブスをつなぐ



【3種のアーカイヴスから「危機」をユーラシア規模で明らかにする】

- 「社会のアーカイブス（Archives of Society）」

  文献データの集積。

- 「自然のアーカイブス（Archives of Nature）」

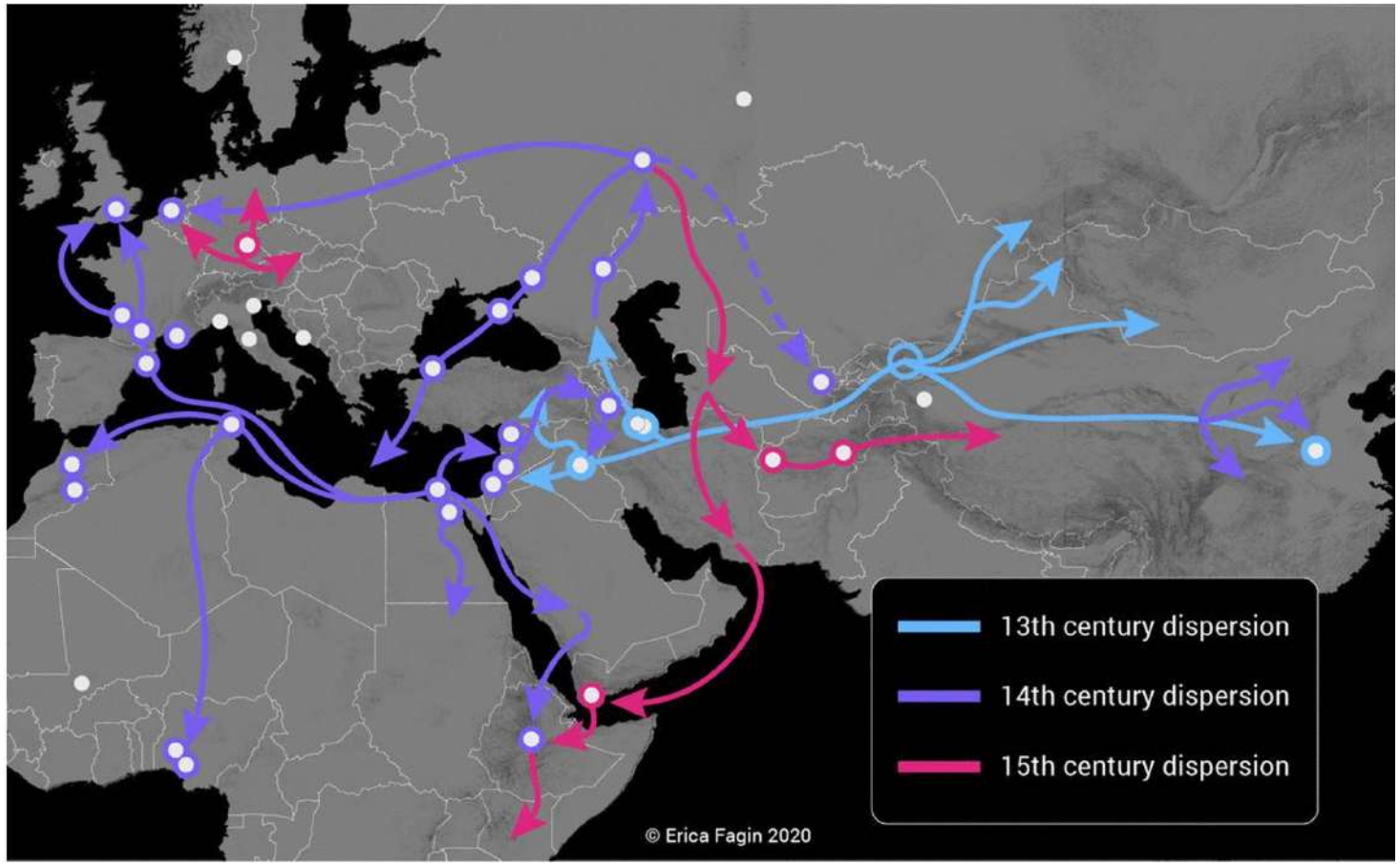
  気候データ（proxy）の集積。気温や降水量といった過去の気候を知るために用いられるもので、木々の年輪や氷河のアイスコア、湖底の堆積物や洞窟の鍾乳石といった経時観測を可能にするマテリアルから取られる。

- 「生物学上のアーカイブス（Biological Archives）」

  古人骨からのaDNAなど、古遺伝学（paleogenetics）の試料。

諫早庸一「ユーラシアから考える〈14世紀の危機〉」『史苑』82巻2号 (2022年), 198頁.

黒死病　中央アジア起源説



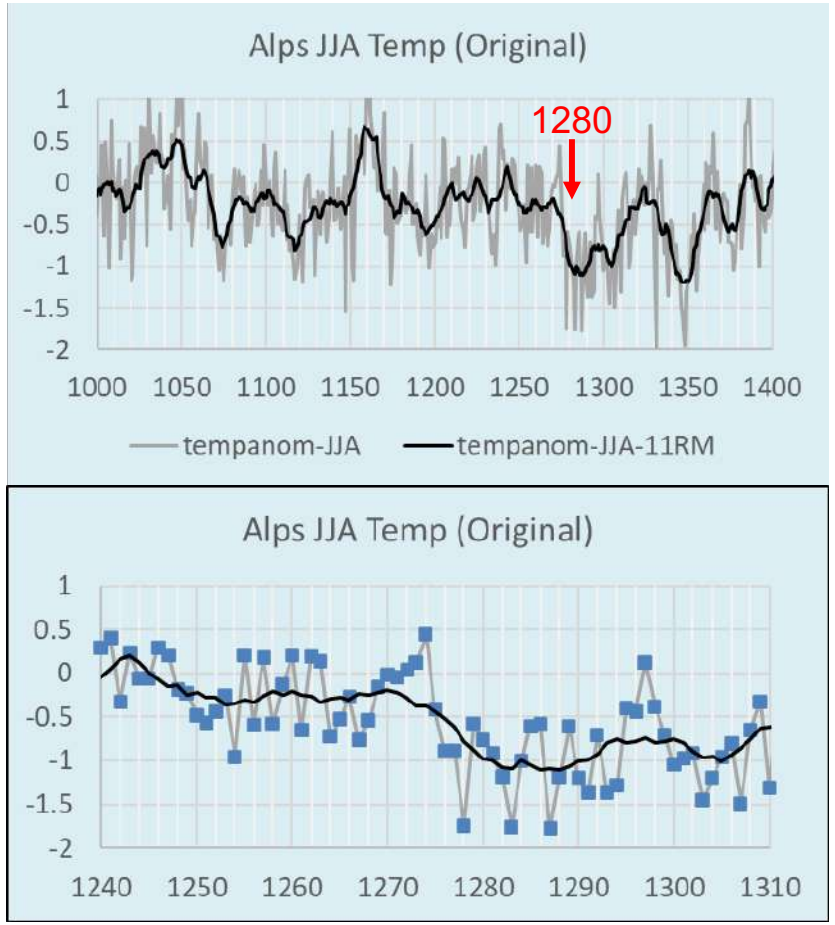
黒死病のパンデミックは、14世紀ではなく、むしろ13世紀——あるいは12世紀中——から起こっていた。

黒死病は、これまで考えられていたような1系統による東から西へのパンデミックではなく、異なる系統による多発的なものであった。

“The Mother of All Pandemics: The State of Black Death Research in the Era of Covid-19,” A Medieval Academy of America Webinar (https://www.medievalacademy.org/page/webinars); Monica Green, “The Four Black Deaths,” *The American Historical Review* 125/5 (2020): 1600–31.

バグダードに雪が降る＝1270～80年代の寒冷化

自然のアーカイヴスからの年輪データ



社会のアーカイヴスからの文献データ

فيها، وقع ببغداد وفر كثير علا على الارض مقدار شبر، وهبت ريح شديدة، وأظلم الجو... وفي آذار، جاء برد عظيم جمد الماء منه وأتلف الاشجار، ووقع في نيسان ببغداد برد كبار أهلك الزروع وقتل المواشي والغنم والطيور.

この年、バグダードで大雪が降り、地面に1シブル（≒24cm）積もった。強い風が吹き、大気は暗くなった。…（中略）…アーザール月（西暦1276年2～3月）には厳しい寒さが来て、川を凍らせ、樹木に被害を与えた。ニサーン月（3～4月）にもバグダードにおいて冷害が多くの耕作地に被害を与え、駄獣たち、牛や鶏を駄目にした。

【左】Ulf Büntgen et al., “2500 Years of European Climate Variability and Human Susceptibility,” Science 331 (2011): 578–583のデータを基に中塚武（名古屋大学）作成。【右】Ibn al-Fuwaṭī; Mahdī al-Najm (ed.), *al-Ḥawādīth al-jāmiʿa wa al-tajārib al-nāfiʿa fī al-miʾah al-sābiʿa* (Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʿIlmīya, 2002), 271–272.

まとめ

- ユーラシア史を大きく転換させた「**14世紀の危機**」を、文理協働研究（歴史学（西洋史＋東洋史）、古気候学、古遺伝学、天文学、情報学、etc.）を通じて、「社会・自然・生物学上のアーカイヴス」のデータから明らかにする。
- ヨーロッパにおいて「**14世紀の危機**」を生み出した社会・生態環境上の諸条件は、すでに13世紀ユーラシアの多地域においてにおいて顕在化していた。
- この協働研究の成果を、来年のスラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム “The Phase of Catastrophe: The Crisis of the 14th Century in Afro-Eurasian Context”にて、世界の研究者たちと議論する。